

※本紙の英語版・中国語版・韓国語版・ポルトガル語版・タガログ語版・フランス語版は、当協会HPからダウンロードできます。

(公財) 福島県国際交流協会 平成 23 年 10 月 15 日発行号

この度の東日本大震災により被災された方々に、心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈りいたします。福島県の今の暮らしをお伝えします。

## 福島の今



結・ゆい・フェスタ  
(福島市 2011.9.24 撮影)



飯坂けんか祭り  
(福島市 2011.10.1撮影)



収穫間近な田んぼ  
(伊達市 2011.10.6 撮影)

## 福島からの声

### 小野 修さん (会津若松市 男性)

今回の震災で自宅のほうは、幸いにも家具の高い所に置いておいた物が落ちたくらいで、電気、水道、ガスも止まることはありませんでした。テレビから刻々と伝えられる被害の様子を見て、これは大変なことが起こったと思いましたね。その後、この会津地方にも沿岸部の方々がどんどん避難してきて、今はそういった方々の支援に関わるボランティア活動をしています。この活動を通じて、いろいろな人とのつながりを感じ、そして人とのかかわりも増えたような気がします。今は震災前と何も変わらない日常生活を送っています。でも目に見えない放射線の除染や、風評被害への対策も含めて、まだまだ頑張っていくしかないと思っています。

### 田部 洋靖さん (三春町 男性)

これまで経験したことの無い強い揺れでしたね。幸いにも自宅の電気、ガス、水道は大丈夫でした。テレビをつけたらちょうど仙台空港に津波が押し寄せる映像が流れていて、いとこの家とその近くだったのですぐ連絡を取ったのですが連絡がつかず、結局一家5人が亡くなりました。その他にも多くの方々が亡くなり、どうしようもなく悲しかったですね。原発事故は、テレビでただただ見ているしかなかったです。この原発事故に関わる放射線の影響に関してはどの情報が正確なのか確かなものがないので、若い世代の人たちの不安はなおさらだと思います。今回の震災で『絆』という言葉をよく耳にします。いろいろな人が自分の持っているものを半分ずつ結っていくという意味のかなど自分なりに解釈しています。

### 崔瑜娜さん (福島市 韓国出身女性)

私は韓国からの留学生です。地震当日は同じ韓国の友人と一緒に避難所に泊まりました。翌日韓国の両親から原発事故のことを知らせる電話連絡が入り、その友人と一緒に高速バスに乗って福島空港まで行き、幸運にも14日にソウル行の飛行機に乗ることができました。その後大学が始まるということだったので自分の目で福島の様子を確認するのが一番と、5月8日に福島に戻りましたが、意外と普通の様子にびっくりしました。その当時は、いつでも避難できるようにとパスポートを持ち歩いたり放射線を心配してマスクをしていたりしましたが、今は何もしていません。私は日本に留学する時に日本で大学を卒業すると決心しました。今はその気持ちを大切に学業に励んでいます。

### 小島 エウリパ アパレンダさん (福島市 ブラジル出身女性)

地震の時は本宮市で仕事をしていました。福島市の自宅に戻れたのは夜の11時を過ぎていました。原発事故があったので、15日に夫と一緒にブラジル大使館が準備したバスに乗って東京へ向かい、ブラジルに一時帰国しました。その後福島に残っている同国の友人と1週間に1回程度電話で福島の様子を聞いて、そろそろ大丈夫かなということで6月6日に戻ってきました。放射線のことには心配していますが、どうしようもないこと。ただ地震には敏感になっていて、いざという時のために大好きなインスタントの味噌ラーメンなどを入れたバックを玄関に置いてあります。日本は「ヒロシマ」「ナガサキ」を経験してそれを耐え抜きました。日本人の持つ強い信念と希望で、今回のこの困難も乗り越えられると信じています。